

私たちは日々の生活のなかで、無意識のうちに世間の平均や他人の評価という「ものさし」を使い、自分や周囲を測っては一喜一憂しています。「物指し」という漢字の成り立ちが大昔に自分の「指」で世界を値踏みしたことに由来するように、私たちは自分の都合や基準ではみ出すものを裁き、心をすり減らしてしまっているのです。

聖書に登場するユダヤ人たちも、アブラハムの権威や年齢という「人間の物指し」に固執し、その枠に収まらない主イエスをサマリア人と蔑み、排除しようとしていました。ちっぽけな人間の基準に神を閉じ込めようとするとき、そこには冷たい裁きと恐れしか生まれません。最後には、その指で「石」を握りしめて主を打ち殺そうとしました。これに対して主イエスは、人間の評価を一顧だにせず、「父なる神を重んじる」という「神さまの物指し」に生きられました。神さまの物指しとは、勝手に相手を値踏みする定規ではなく、その御手をもって私たちに進むべき方向を優しく「指し示して」くださる愛の視点であるのです。

さらに主は「**私の言葉を守るなら、…決して死を見ることはない**」(51 節)と約束されます。これは肉体の死という出来事に視線を釘付けにされ、絶望に支配されることがなくなるという意味です。主イエスは「**アブラハムが生まれる前から、『私はある』**」(58 節)と宣言され、時空を超えて常に「今ここに共に在る」永遠の神としての御名を明かされました。

神さまの物指しは、私たちの罪や欠点を冷たく裁く定規ではありません。私たちの罪を背負い、十字架の上で釘打たれた「傷だらけの約束の御手」です。主は今もその御手を広げ、世の終わりまでの伴走を約束しておられます。今日、私たちが固く握りしめているちっぽけな人間の物指しや石を手放し、手をひらいて、この主の愛の御手を人生の確かな土台として受け入れましょう。